

# 武寧王陵発見の金製耳飾について（補遺）

——新資料5例の追加と素環式耳飾に関する疑問に答えて——

伊 藤 秋 男

1. はじめに
2. 耳飾の構造を中心とする考察
3. 百濟地域発見の耳飾例
4. 武寧王陵の耳飾が提起する諸問題
5. おわりに
6. 追補——尹世英・菅谷文則両氏の疑問に答えて——
7. 引用図版出典目録

## 1. はじめに

ほとんどの百濟古墳が既盗堀墳であるため、ややもすると立遅れがちであった百濟古墳の研究にとって、1971年7月の武寧王陵の発見は、まさに歴史的な出来事であった。それが百濟古墳としては珍しく未盗堀墳であったためばかりではない。羨道内に置かれた墓誌石から古墳の築造年代と被葬者が確定された結果、百濟の古墳文化の研究において武寧王陵がひとつの重要な定点として役立てうるためでもある。くわえてこの発見によって6世紀代の百濟王陵の形式と服飾品や副葬品の内容に関する規範的な知見が得られたという点において、武寧王陵の考古学的価値は、はかりしれないほど大きいと言えよう。

本稿ではかずかずの装身具のなかでもとくに金製耳飾について、その構造、類例、系譜などの諸問題をはじめ、この耳飾のもつ考古学的意義や百濟地域発見の耳飾との関係などについて、つぎに考察してみたい。

なお本論文は、韓国・忠南大学校付属百濟研究所の発行する『百濟研究』第5輯（1974）に掲載されたものに、百濟耳飾の新資料5例を補ったものである。これをここに再録することについては、忠南大学校・百濟研究所長・尹武炳教授のご快諾を得たことを記して感謝の意としたい。

## 2. 耳飾の構造を中心とする考察

武寧王陵の耳飾は、王の頭部から1対<sup>(1)</sup>、王姫の頭部から2対<sup>(2)</sup>が検出され、計3対をかぞえる。王姫の左足もとから、あるいは金製嬰珞付小環ではないかと疑われる2対の耳飾様装飾品が発見されているが<sup>(3)</sup>、報告書にしたがってこれらをも耳飾<sup>(4)</sup>であるとすると総計5対の耳飾が武寧王陵から発見されたことになる。

(a) 王の金製耳飾 (第4図1)

報告書で「金帽曲玉および心葉形垂飾付耳飾」と名づけられた耳飾で、主環(径2.03cm)に金帽曲玉と心葉形板をそれぞれ下垂飾とする二條の垂飾がかかっている。主環を含めて心葉形垂下飾の先端までが8.3cm、金帽曲玉を結縛した垂飾の長さは8.3cmをはかる。主環の平面形は正円というより、やや三角形のおもむきがある。環体の円形断面の径は約4.5mmであって、細環式耳飾としてはきわめて太径である点が特徴的である。

一方の中間飾は径約9mmの2個の円筒体よりなる。一方の円筒体の先端は半球形のキャップ状をなし、ここから先端が心葉形を呈する花卉状の3本の突起が立上り、あたかも透しのある円筒体となる。しかもキャップの表面には花卉状に、また突起部分には周縁に限なく金線と顆粒によって装飾がほどこされるという、きわめて技のこんだ円筒体である。中間飾はかような円筒体を上下に相対させたもので、その全長は約3.2cmである。この円筒体の内部は当然のことながら空洞であり、かつこれらが連繫金具だけで固定されているため、ふたつの円筒体が相接する中央部分では左右にずれやすく、やや不安定である。したがってこのまゝ、実際に着用されたとは到底考えがたく、この中間飾の内部にはおそらく香木に類するものが嵌入せられていたと考えたい<sup>(5)</sup>。

下垂飾は大形の心葉形板(巾4.3cm)と、それに添飾された2枚の小形心葉形板からなるが、心葉形板がいずれも横長で、大形のそれにあっては連結される部分に大きな扶りこみがみられるのが特徴的である。また添飾用の一方の小形心葉形板が連繫金具によって支えられるのではなく、金線によって大形心葉形板に直接結縛されているのが注目される。これは他の垂飾にはみられない技法<sup>(6)</sup>で、あるいは脱落した添飾板を補修したものかもしれない。

他方の中間飾は5節に分かれ、それぞれに1個の籠球体がつけられている。この籠球形の装飾品は12個の小さな金環が球形に接合されたもので、上下に各1個、側面に10個が上下2列に配列されている、このような籠球体は新羅古墳出土の耳飾にも一般的に用いられる装飾品であるが、ただこの耳飾にあっては第4図1に示すように、上下二列の小環が互い違いに網目状に配列されている点がいちじるしく特徴的(C型)で、あとにも触れるごとく古新羅古墳出土の耳飾においてはほとんどその用例が知られていない。1個の籠球体には5個の小瓔珞が金線の腕木を介して垂吊され、かつ小瓔珞は古新羅古墳出土のそれにも見うけられるように凹面状に湾曲している。籠球体を形成する小円環の表面と小瓔珞の周縁には顆粒状装飾がほどこされ、中間飾に豪華な雰囲気をあたえている。ただ籠球体につけられた顆粒の大きさが他の部分のそれと比べて不揃いである点が注意される。

下垂飾は金帽をつけた曲玉<sup>(7)</sup>である。金帽は顆粒によって装飾された小環をキャップ状に接合したもので、左右に計2個の小瓔珞が垂吊されている。

(b) 王姫の金製耳飾その1 (第4図2)

報告書で「草実形および弾丸形垂飾付金製耳飾」と呼ばれた耳飾で、王姫の頭部辺で次の

べる耳飾（その2）とともに発見された。環径2.1cm、全長約12cmの2條の垂飾をもつ耳飾である。主環はほぼ正円形を呈し、その断面は直径約0.5cmの円形である。これは太環式耳飾の耳環部が縮小化したとみるより、新羅の細環式耳飾における耳環部の一般的な変化<sup>(8)</sup>に照らして、細環が大形化したものと考えの方が正しいと思われる。小環を介して垂下せられる2本の垂飾はそれぞれ金鎖からなり、長い垂飾には弾丸形の下垂飾が、はた短い垂飾には山梔形の下垂飾がつけられている。

長い垂飾の鎖部分は8節に分かれ、上から7節目まではそれぞれ4本の捻針金が放斜状に突出し、この先端に円板形の瓔珞が添飾されるが、最下段には6枚の瓔珞がつけられている。他の短い垂飾は3節に分かれ、その最上段には小環を接続して作った半球体が、また中段・下段にはループ状の4枝が放斜状に結縛され、それぞれ4枚の心葉形瓔珞によって装飾されている。そして第1と第2の瓔珞飾の間には、接合された小環からなる金帽をいただいた緑色のガラス玉が連ねられている。山梔形の下垂飾に顆粒状装飾をとまなうのは他に多くの例をみるが、しかし心葉形瓔珞にみられる顆粒状装飾が周辺部でなく端面部に加えられている点は、他に例をみないところである。

#### (c) 王姫の金製耳飾その2（第4図3）

主環外径2.2cm、全長10.6cmの耳飾で、王姫の金製耳飾その1における山梔形の下垂飾をもつ垂飾と全く同形同大、しかも同じ造りである。ただこの耳飾においては垂飾が第2の細環に結縛される部分と最上段の瓔珞によって飾られた半球体との間に約0.5cmの間隔があり、連繫金具である針金が露出して均整感が失われている。したがってこの最上段の半球体の下には、元来緑色ガラス玉とほぼ同じ大きさの装飾物（おそらく香木のようなものか？）が連結せられているのではなかろうか。このことはさきの王姫の金製耳飾その1における垂飾についても考慮すべきことであろう。また王姫の頭部から2対の耳飾が発見されたことから、いずれか一方の耳飾は冠帽用の垂飾として用いられたものであるかもしれない。

#### (d) 金製耳飾2対（第4図6）

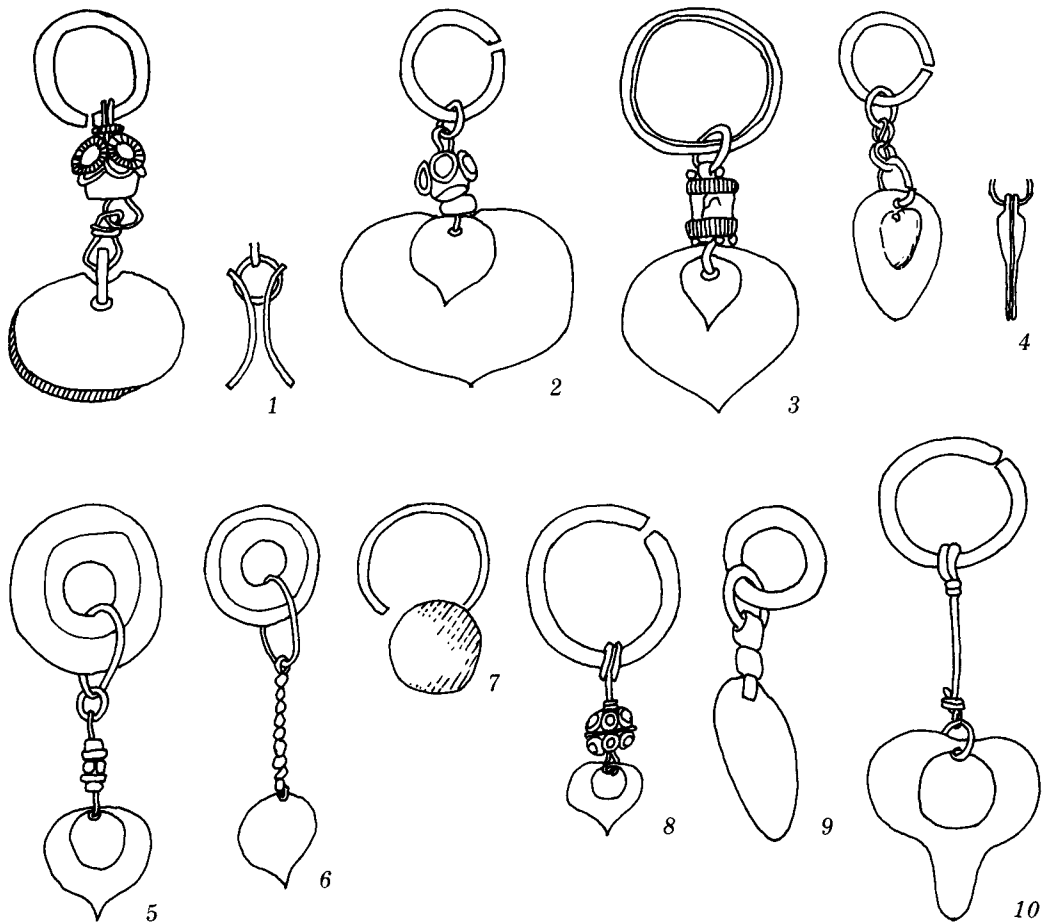
王姫の足部西方から発見された、主環外径1cm、全長3cmの耳飾である。直径1.1cmの円形垂飾が金の針金によって直接主環に結縛され、中間飾は元来なかったものと考えられる。報告書では王姫が幼少時に着用したものとの見解がのべられているが<sup>(9)</sup>、全長が3cmという小形の耳飾は、これまでに発見されたことがなく、あるいは步揺として他の用途に用いられたものとも考えられる。

### 3. 百済地域発見の耳飾例

武寧王陵出土の耳飾以外に梅原末治氏や軽部慈恩氏が調査された耳飾例の中にも、公州地方で発見されたと伝えられる若干の耳飾があるので、ここに集成する。

(a) 公州宋山里第6号墳(塼室墳) 発見金製耳飾(第1図1)

「梅原考古資料<sup>(10)</sup>」第10267号の資料(スケッチ)による耳飾で、そのタイトルに「純金製耳飾、忠清南道公州宋山里塼墓内発見、総督府博物館蔵、昭(和)8・10・23発見」とある。この資料を最初に注目した穴沢味光氏が資料のコピーを添えて小泉顕夫氏に照会し、同氏によってこの耳飾が四神壁画をもつ宋山里第6号墳から発見されたものであることが確認された<sup>(11)</sup>。1対そろって発見されたものかどうかわからないが、とにかくこれは今日まで同墳出土の遺物内容が全く不明だっただけに、今後の公州古墳の研究にとって、きわめて貴重な資料のひとつに数えられることになるであろう。



第1図 百濟地域発見の耳飾(縮尺:不同)

- 1: 宋山里第6号墳(塼室墳), 2: 宋山里古墳,  
 3: 船尾里第3号墳, 4: 忠北清州地方, 5・6・8  
 10: 公州百濟古墳, 7: 金鶴里古墳, 9: 扶余邑塩倉  
 里壺棺.

全長5.2cm、主環外径1.5cmの細環式耳飾である。中間飾は「青玉ガラス」からなり、その頂部には顆粒状装飾のある小円環を接続した半球形の金帽がつけられ、その形状は武寧王陵出土の王姫の耳飾にみとめられた緑色ガラスの中間飾にきわめてよく似ている。下垂飾には2枚の内湾する楕円形板が背中合せに垂吊され、連結用の孔の上部がわずかに扶りこまれているのが注意される。そして耳環・中間飾・下垂飾とを結ぶ連繋金具は上下2個のループ状の針金からなっているようである。

(b) 公州宋山里古墳発見耳飾（第1図2）

「梅原考古資料」第10274号の資料（写真）による耳飾（1対）で、おそらくその保存状態から金製とみなされる。これは1條の小玉、太環・小環各1対それに2個の花形飾金具が1枚のキャビネ板に撮影されているが、同一古墳から発見された一括遺物であるかどうかは不明である。因みにこの資料のタイトルに「忠清南道公州郡公州宋山里古墳出土品、公州博物館所陳、小林氏写真、昭和15年10月19日」とあり、公州博物館に所蔵され、かつ陳列されていた資料であることが知られる<sup>(12)</sup>。

法量についての記載はないが、実大として撮影された資料とみなされることから、細環外径約1.4cm、心葉形垂飾巾約3cm、全長約5cmと推定される。したがって比較的小形の主環に大形で、しかも量感のある下垂飾が垂吊された耳飾であることが、まず注意される。細環の平面形はほぼ円形に近い。中間飾は小円環からなる金帽をいただいた球体（紫色ガラス玉？）をなし、その下にさらに1個の小玉が接続されているようである。下垂飾は上部に扶りのある心葉形板で、この表裏に2枚の小形心葉形板が添飾されている。この下垂飾の心葉形板は長大であるばかりか、めだって横長で心葉形というより偏楕円形に近い形状を呈する点が特徴的である。耳環・中間飾を連結する連繋金具は単なる金線のようなものである。

なお軽部慈恩『百済美術』（1946）の165頁に「その中（図版26）の1は耳飾の下は宝冠の飾りをつけ、その下に2個の紫色の玻璃玉を附し、更にその下に大小各1枚ずつの心葉形の垂飾を附したもの（耳飾）」という説明がありながら、該当する写真（あるいは挿図）のみあたらない耳飾とは、おそらくこの耳飾のことであろう。

(c) 公州舟尾里第3号墳発見金製耳飾<sup>(13)</sup>（第1図3）

窮隆状天井をもつ石室墳（軽部慈恩氏による第2類型<sup>(14)</sup>）から、百済地方では唯一といわれる玉蓋とともに出土した。『考古学雑誌』第26巻第4号の口絵写真が実大で示されたものを見ると、主環の外径は2.2cm、全長5.4cmの細環式耳飾である。

主環の断面は多角形で、やや稜線がめだつ。中間飾は直径6.5mm、高さ7mmの中空の円筒体である。この上縁と下縁は蛇腹状の線刻によって装飾され、しかもこの上面と下面に4個の金粒が添飾されている。上面に付けられた金粒のうち1個が剥落しているようである。下垂飾は重

厚な、巾2.4cm、高さ2.2cmの心葉形板からなり、この表裏に各1枚の小形心葉形板が添飾されている。これらをつなぐ連繫金具は巾のせまい板針金からなる。平面形が円形を呈する極細の細環、小形の間飾、尖鋭な心葉形垂飾、それに細い板針金からなる連繫金具などの諸特徴から、この耳飾は百済地方における古式耳飾のひとつに数えられる貴重な資料であると言えよう。

軽部慈恩氏によると「昭和5年秋、舟尾里第3号墳から玉蓋と共に出土した<sup>(15)</sup>」とあるが、舟尾里百済古墳一覧表<sup>(16)</sup>によると、舟尾里第3号墳は、同氏が昭和5年7月に調査した時にはすでに大破していた古墳である。一方この一覧表における第5号墳の備考には「昭和5年8月頃附近のものにより盗堀、耳飾用金鎖及玉蓋を出土す」（傍点は筆者による）とあることにより、この耳飾はおそらく舟尾里第3号墳出土の資料でなく、同じく第2類型の石室をもつ第5号墳から発見された可能性が大きい。

(d) 公州舟尾里第5号墳発見金銅製耳環<sup>(17)</sup>

細環1個が発見された。写真(注17参照)が実大であるとする、長径2.7cm、短径2.4cm、断面直径2.5mmの耳環で、大きさに比べて環体が細いという特徴は(C)の金製耳飾のそれと一致する。

(e) 公州宋山里第8号墳発見金製耳環<sup>(18)</sup>

この古墳は、側壁の上部二枚の石を内側に持送った竪穴式石室墳（軽部慈恩氏による第4類型—注14参照—）である。ここから硬玉製曲玉、銀製釧や約1500余個をかぞえるガラス製小玉などとともに1個の耳飾用金環が発見された。平面形はほぼ円形を呈し、その外径は1.2cmである。環体の断面も円形である。

(f) 公州牛禁里第1号墳発見金銅製耳環<sup>(19)</sup>

舟尾里第3・5号墳と同じく第2類型に属する石室墳から、硬玉製曲玉や約200個の小玉とともに2個の金銅環が発見された。長径2.2cm、短径1.6cm、環体直径3.5mmの耳環で、三角形に近い偏円形を呈する。環の大きさに比べて環体が太厚であるのが特徴である。

(g) 公州百済古墳発見金製耳飾(3対半)<sup>(20)</sup>

その1(第1図5)は法量不明の太環式耳飾(1対)である。中間飾は小形の円筒体であるが、それが板金からなる筒なのか、あるいは小円環を筒状に接続したものであるかは、写真(注20参照)が不鮮明のため不明である。下垂飾はやや縦長の心葉形板で、その表裏には各1枚の小形円形板が添飾されている。そしてこれらをつなぐ連繫金具は細い板針金からなっているようである。

その2(第1図6)も同じく法量不明の太環式耳飾(1対)である。連繫金具が兵庫鎖からなり、中間飾をとまわらない。下垂飾は1枚のやや横長の心葉形板で、添飾板はないようである。太環の耳環にかかる1個の細環が、他と比べてきわめて細い点が注目される。

その3（第1図8）は法量不明の細環式耳飾（1個）である。環の外径が大きく、垂飾部分が全体に比してきわめて短い点が、この耳飾の特徴である。細環の平面はほぼ正円形を呈し、中間飾は小円環を接続した籠球体である。下垂飾は1枚の心葉形板と2枚の心葉形添飾板とからなる。連繋金具は細い板針金である。

その4（第1図10）も同じく法量不明の細環式耳飾（1対）である。針金（金線）によって細環と下垂飾とを直接連結し、中間飾をとみなわない。それが破損しやすい玉類か、あるいは有機質の材料によって作られていたため消失したとも考えられる。下垂飾は上部に扶りこみのある心葉形板からなり、さらにこの先端部が長い乳頭状（一方のものは鉾先状）を呈するのが特徴的で、これは慶州皇吾里16号墳第1 塚から出土した金製耳飾<sup>21</sup>や南鮮出土と伝えられる耳飾<sup>22</sup>の下垂飾と比較することができるかもしれない。この異様な心葉形板には小形円形板が添飾されている。なお、やや太めの細環と乳頭状（または鉾先状）の先端部をもつ心葉形板からなる垂飾などの諸特徴は、これが後期的な耳飾であることを物語っている。

(h) 公州金鶴里古墳発見金銅製耳飾<sup>23</sup>(?)（第1図7）

金鶴里古墳から発見されたと伝えられる資料で、出土古墳の号数は不明である。細環の外径は他遺物との比較からおそらく2～2.5cmである。軽部慈恩氏によると、この環に「球」がつけられた耳飾であると述べられているが、口絵写真（注23参照）によると、それは球ではなく、直径1～1.5cmの円盤であるらしい。2個1組として発見されており、これを一種の耳飾とする軽部慈恩氏の見解は正しいかもしれない。

(i) 伝公州宋山里古墳出土耳飾（第2図1）

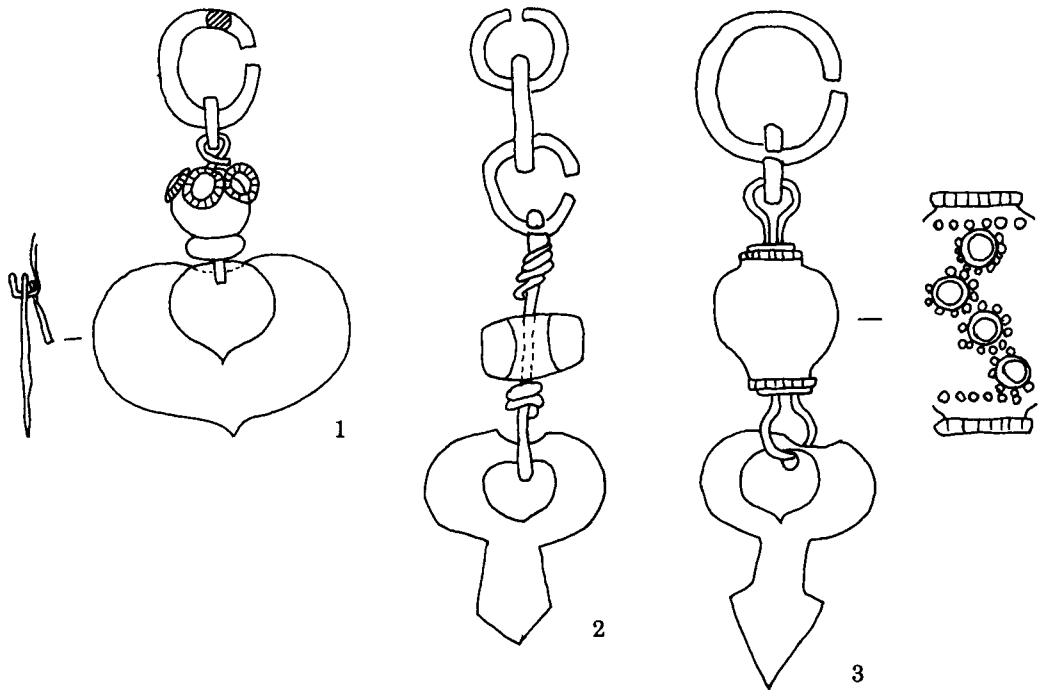
「梅原考古資料」第10273号の資料である。これによると1対の金製耳飾で、当時（昭和15年10月19日調査）竹熊武男氏が所蔵されていたものである。

全長5cmの細環式耳飾で、偏円形の耳飾の長径は約1.2cmである。中間飾には直径8mmの球形の「ルリ玉」1個と直径5mmの円板状をなす「青玉」1個が上下に重ねられ、しかも上のルリ玉には、蛇腹状の線刻のある5個の小金環を接続した花笠が被せられている。下垂飾は横長の長大な心葉形板で、その最大幅は全長のほぼ半分にあたる2.3cmをはかる。この心葉形板の上縁は、かすかに抉りこまれ、この側縁に1枚の小形心葉形板が添飾されている。しかし、もとはこれと反対側にももう1枚の小形心葉形板がかかっていたものと思われる。これらをつなぐ連繋金具は、細身の板針金である。

型態的には、同じ宋山里古墳から発見された第1図2の耳飾に似た資料である。

(j) 伝公州監獄裏山出土耳飾（第2図2・3）

「梅原考古資料」第10278号の資料で、それによると、「昭和2年公州監獄裏山出土」、「昭和19年9月24日実見」、「西宮市八馬兼介氏蔵」と記録されている。監獄裏山出土の所伝を信ずる



第2図 公州宋山里出土耳飾

1：伝宋山里古墳（実大の約1.5倍）、2・3：伝公州監獄裏山出土（実大）

とすれば、この2種の耳飾は、宋山里あるいは校村里のいずれかの古墳から発見されたものと考えられる。これを実見した梅原末治氏みずから「作りノ上ヨリ見テ所伝摺ルベキカ如何」と注記されているが、その構造上の特徴からして、これが公州出土かどうかはひとまずおくとしても、百済の耳飾であることにはまず間違いのないと思われる。

その1（第2図2）は全長8.5cm（資料には縮尺が示されていないが、方眼の上にスケッチされているので、図は実大で描かれたものと判断する）の金製耳飾で、1対のうち1個が残っていたものと思われる。直径1.2cmの小形の耳環に2つの同形同大の遊環がかかっている。中間飾は直径1.4cm、高さ8mmの円板状の「玉」で、その材質、色についての記載がない。下垂飾は長さ2.8cm、最大幅2.3cmの結紐形の金板で、その上縁には大きな袂りがみられる。またこの結紐形板の偏円形を呈するところには、小形心葉形板が添飾されている。これらをつなぐ連繫金具は金製の針金で、中間飾である玉の上下それぞれ1.5cmにわたって露出し、ここで環および下垂飾にかけて反転されてきた針金の端部を2～3回からめている。中間飾に「玉」が用いられている点から、これを百済の耳飾として間違いのないと思う。

その2（第2図3）は全長9cmにおよぶ大形の金製耳飾である。直径2cmの細環に小さな遊環を介して中間飾が垂下される。中間飾は板金の球体（直径1.6cm）をなし、その表面には小形の金環が蠟付けされ、さらにそれぞれの金環の周りには金の顆粒がとりまいている。この小金環の内部には「朱ヲ加ヘタリ」の注記があり、ここに朱あるいは別の何かが象嵌されていた可能性がよい。

下垂飾はその1の例と同じく結紐形であるが、その先端部が矢先状を呈する点が異っている。



結紐形の金板の長さは3.5cm、最大幅は2.3cmで、この部位に小形心葉形板が添飾されている。連繋金具は、その両端がループ状をなす長さ3.7cmの金製板針金であるが、その幅については明記されていない。

(k) 扶余邑塩倉里発見金銅製耳飾<sup>24)</sup>(第1図9)

塩倉里上塩部落の壺棺の中から、2個の琥珀製管玉と20余個の歯牙片とともに発見された耳飾である。金銅製であるため保存状態がいたって悪く、1対のうち1個は辛うじて完全のまま、検出されたが、他の1個は主環部のほとんどを欠失している。

ほぼ平面形が円形を呈する銅環の外径は1.5cm、全長が4.4cmという小形の耳飾である。中間飾は図から判断するところ4個の小環からなり、この最下端のものに長さ2.1cmの縦長の心葉形板が下垂飾として垂吊されている。下垂飾はそれぞれ1枚の心葉形板からなり、小形の添飾板をとみなわない簡素な耳飾である。

(l) 忠北清州地方出土金製耳飾<sup>25)</sup>(第1図4)

全長4.5cm、耳環径約1.3cmのやや小型な細環式耳飾である。耳環と下垂飾とはそれぞれ小環を介して鎖状の連繋金具によって連らねられ、中間飾をもたない。縦長の心葉形を呈する下垂飾は、中央部がわずかに打出され、これを2枚背中合せに垂吊したもので、本来はおそらく蠟付けされていたものと考えられる。このうち一方の垂飾板の懸吊用小孔の直下に、もうひとつの小孔がみられるが、それが補修用の孔なのかどうか詳かではない。

(m) 梨花女子大学校博物館蔵金製耳飾<sup>26)</sup>

全長ほぼ5cm、型式とその構造において宋山里第6号墳出土例にきわめて近い細環式耳飾である。耳環の直径が約1cm前後と、これが全長に比して小形である点特徴的である。中間飾は小環を接続した笠形の冠帽によって包摂された紺色丸玉と、その直下の緑色を呈する円盤状の小玉とから成っている。下垂飾は横長の心葉形と形容するよりは、むしろ楕円形に近く、上縁のところには顕著な挟り込みがみとめられる。下垂飾に添飾される2枚の小形心葉形板は反りがなく平板である。また、これらを相互に結縛する連繋金具は一個のループ状をなす針金である。

(n) その他の金銅製環

公州の百濟古墳から出土したと推定される4個の金銅製細環がある<sup>27)</sup>。3個は完存するが、1個は半分欠失している。環の長径は1.7~2.1cmで、すべて偏円形を呈する。

上に紹介した耳飾資料のほとんどは、すでに発表されたものが多いが、しかし壁画塚室墳として有名な宋山里第6号墳から金製耳飾が出土していることが知られたのは貴重な発見という

べきであろう。この古墳は埴の構築技術の比較から、同じ埴室墳である武寧王陵より編年的に古いものであり、また窮隆状天井をもつ古式百濟古墳のひとつに数えられる舟尾里第3号墳(あるいは第5号墳?)では古いタイプの耳飾が発見されている事実にもとずけば、三国時代におけるこの百濟地域でも新羅地域の場合と同じく、細環式や太環式の耳飾が古くから当時の装身具として一般的に広く佩用されたと推定することができよう。

#### 4. 武寧王陵の耳飾が提起する諸問題

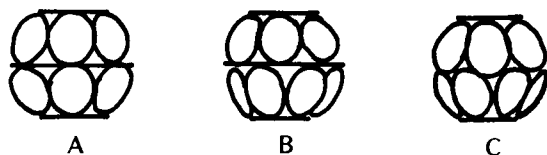
まず王陵から出土した3対の耳飾の系譜について考えてみたい。

王の耳飾にともなった心葉形の下垂飾は、高句麗のみならず新羅の耳飾では一般的な型式としながらも、それが上辺に抉りのある横長の心葉形を呈することは、新羅の後期的な耳飾にみとめられる特徴である。花卉状の立上りのある円筒体2個を上下につき合わせて、その内部に香木などを嵌入したのではないかと推定される中間飾は、新羅古墳からの発掘耳飾には今日までその類例がない。しかしこのような構造をもった中間飾は、報告書の指摘にもあるように南韓出土と伝えられる耳飾<sup>28)</sup>や、おそらく同じく南韓出土と推定される耳飾<sup>29)</sup>にみることができる。これらの円筒体は、その長さに比べて径が大きく重厚な感があり、武寧王の耳飾にみられるような洗練された美しさはない。これに対して構造的にも、また均整美を備えているという点でも、王の耳飾と対比できるものとして、同じく南韓出土と伝えられる耳飾(第4図4)や熊本県船山古墳出土の耳飾(第4図5)などが挙げられるであろう。

王の耳飾では花卉状の立上りをもつ円筒体であったのに対し、これらの諸例は3枚あるいは4枚の鋸歯状突起のある円筒体である点が異なるが、これらを上下に接続するという構造が類比的である。くわえて王の耳飾における花卉状の突起につけられた板金による円形の装飾は船山古墳出土例に、また上下の半球形キャップにみられる火炎状の装飾は伝南韓出土例の鋸歯状突起にみとめられるなど、技巧的には、さきの花卉状の突起をもつものをも含めて同一グループとして把えることのできる耳飾である。とくに伝南韓出土の耳飾は長さ3.6cmの狭長な心葉形下垂飾をともなっているが、これは伽倻地方の耳飾にみられる顕著な特徴であることを考慮すると、この南韓出土とは、おそらく洛東江下流域の伽倻地域で出土した耳飾であると考えて差支えなからう。とすれば日本古墳から出土する耳飾の系譜が、百濟→伽倻につながるとする野上丈助氏の見解<sup>30)</sup>にとって、この武寧王の耳飾はきわめて示唆的な資料であると言えよう。

王の耳飾にともなった、5個の籠球体と1個の曲玉とからなる副飾は、構造的には金製の空玉を接続した慶州皇吾里16号墳第4 槨<sup>31)</sup>・慶州皇吾里54号墳甲塚<sup>32)</sup>・義城塔里古墳第1 槨<sup>33)</sup>出土の新羅の諸例(B群第7型式<sup>34)</sup>)につながるものであろう。ことに前者2例の場合には、ともに下垂飾として曲玉が用いられていることも王の耳飾に共通していることから(義城塔里古墳第1 槨出土例には下垂飾欠失)、王の耳飾の副飾については、新羅の連珠式耳飾との対比がより可能であろう。ただここで注意しなければならないのは、その籠球体が小金環を網目状に接続した、いわゆるC型(第3図)を呈することである。これに対し洛東江流域の伽倻地域や新

羅地域の耳飾にみられる籠球体は、横帯を中心に上下に並列するA型やB型（第3図）の型式に属するものがすべてで、C型の籠球体を中間飾とする耳飾は、今日まで1例も発見されたことがない<sup>35)</sup>。



第3図 籠球体の型式

高句麗古墳出土の耳飾としては良好な資料にめぐまれないが、しかし『朝鮮古文化綜鑑』第4巻（1966）の図版40に集成された耳飾の中には、あきらかにA型（同図版104左）、B型（同図版101）、C型（同図版99・104右・106）の籠球体を中間飾とする耳飾が存在する。とりわけA型籠球体をもつ耳飾（同図版104左）は、耳環部の細い細環とか三角形の尖りを有する心葉形垂飾の形式から、同図版の98や102の耳飾と並んで高句麗における古いタイプの耳飾であると考えられる。

また4世紀末から5世紀初頭の古式古墳であると推定される慶州皇吾里14号墳第1・2棟出土の耳飾<sup>36)</sup>の中間飾もA型の籠球体からなっている。これはA型あるいはB型の籠球体がC型のそれより起源的に古い型式であることを物語っているかもしれない。このように新羅ではC型の籠球体が発見されていないのであるから、A型・B型籠球体の製作技法が全古新羅時代を通じて踏襲されたと考えざるを得ないところに新羅耳飾工房の特色があろう。

一方、百濟地域では今日のところA型・B型の籠球体からなる耳飾が発見されていないが、武寧王の耳飾にみられるC型籠球体は「A型あるいはB型からC型へ」という発展過程の中のひとつの所産とみるべきものであって、この籠球体状装飾の系譜からみれば、おそらく高句麗耳飾の製作技法に強い影響をうけながら発展してきたと推定されるところに百濟耳飾工房の特色があると言えるのではあるまいか。

王姫の耳飾のひとつにともなった弾丸形の下垂飾は、今日のところ他に類例をみないものである。これを垂吊する鎖が8節に分かれ、瓔珞をつけるための捻針金を直接連繋金具である鎖に結縛する技法は、新羅古墳出土の耳飾にはみとめられないのに対し、金冠塚<sup>37)</sup>、金鈴塚<sup>38)</sup>、飾履塚<sup>39)</sup>瑞鳳塚<sup>40)</sup>などの冠の垂飾には、この技法がひろく用いられている。百濟の王冠の型式は、いまだ明らかにされていないが、もし新羅の王冠の形から類推することが許されるならば、この弾丸形と山梔形の垂飾をもつ耳飾は、あるいは側頭部に垂吊される「王冠用の垂飾」として用いられたかもしれない。王姫の頭部辺から2対の耳飾が検出されたことも、それぞれ異なった用途を考慮すれば、いささかの矛盾もなく理解できるのではあるまいか。

王姫の2対の耳飾には、ともに山梔形の下垂飾がともなっているが、これは新羅耳飾にはみかけない要素である。このようなタイプの耳飾は、確実な古墳出土例として昌寧校洞第31号墳<sup>41)</sup>や晋州中安面一洞造山第1号墳<sup>42)</sup>の耳飾があげられるように、その分布は伽倻地域に限られる。この意味で王姫の耳飾はともに伽倻的な特徴を備えた耳飾である。ただ小金環からなる金帽をつけたガラス玉を中間飾の一部として利用する技法は、さきに紹介した百濟古墳出土の耳飾に

ひろくみうけられる。百濟耳飾の発見例が十分知られていない今日では速断することを避けねばならないが、金帽のついた丸玉からなる中間飾は、あるいは百濟耳飾の特徴のひとつに数えるかもしれない。

要するに武寧王陵出土の3対の耳飾は、百濟独自の要素をつよくもちながらも、中間飾や下垂飾の一部には高句麗・新羅・伽倻耳飾の特徴をみとめることができる。なかでも伽倻耳飾との関連がもっとも強いことが指摘されよう。ただ百濟耳飾の発生的系譜が高句麗・新羅・伽倻のいずれにつながるかの問題については、今日の不十分な資料では判断することができない。しかし王冠飾にみられる忍冬唐草文様の文化的系譜や三国時代における百濟の地理的・歴史的関係を考慮すると、あるいは耳飾佩用の生活様式は高句麗のそれに倣ったものではないかと思われる。

百濟古墳出土の耳飾、あるいはその出土と伝えられる耳飾は、ほとんどが公州地域に限られるとはいえ、百濟社会のある階層では耳飾の佩用が新羅の場合と同じく一般化していたことが推測されるほどに、その発見例が意外に多い。しかしその大半は正確な考古学的記録を欠く資料である。この意味でも精細な調査と記録を経た武寧王陵の耳飾は、無二の考古学的資料であるばかりか、墓誌銘による絶対年代の判明した唯一の耳飾として、その資料的価値はきわめて高く、今後の耳飾研究の定点としてながく用いられることになるであろう。

## 5. おわりに

武寧王陵出土の耳飾を構造的な側面から分析を試み、これを高句麗・新羅・伽倻の耳飾と対比させることによって、伽倻耳飾との関連がもっとも強いことを指摘し、くわえてその発生的系譜は高句麗耳飾につながるものであることを推論した。

ここに集成された百濟耳飾の諸例から、百濟においても高句麗や新羅と同様に耳飾佩用の生活様式が一般化していたと推定した。また小泉顕夫・穴沢味光両氏の協力によって、第1図1の耳飾と公州宋山里第6号墳の壁画埴室墳出土の耳飾とを同定することができたことは、本稿のひとつの大きな成果であると言えよう。

本稿をまとめるにあたっては、穴沢味光氏から多々有益なご教示をいただいた。また第2図のトレースとレイアウトは、南山大学大学院修士課程考古学専攻生 山崎恒哉君の労によった。ここに記してともに感謝したい。

なお本稿は、昭和48・49年度南山大学特別研究費による研究成果の一部として発表するものである。

## 6. 追補——尹世英・菅谷文則両氏の疑問に答えて——

かつて筆者は、高麗大学校博物館主任 尹世英氏の碩士論文「古新羅・伽倻古墳の編年に関する研究——古墳出土の冠帽を中心に——」の大梗を紹介し、あわせて2・3の問題点を指摘したことがある<sup>(4)</sup>。その問題点のひとつが、中間飾も垂下飾ももたない、いわゆる耳環だけから

なる素環式耳飾（尹氏による耳飾の始源的型式）をめぐる問題であった。このなかで筆者は、この素環式耳飾について「個々の耳飾を詳さに調べる限り、これらは環だけからなる耳飾のではなく、中間飾と垂飾とをもつ普遍的な耳飾であって、中間飾と垂飾は有機質の材料によって作られていたため腐敗消滅してしまったか、あるいは埋没時に主環部から遊離して偶然発見され得なかったものと考えられるのである。（以下略）」とのべ<sup>44</sup>、原則的には素環式耳飾は佩用されなかったとする立場をとった。これに対し尹氏は、氏の豊富な発掘経験から、垂飾部分が脱落腐敗したと推定される状況のもとで発見される素環の耳飾がほとんどないことを指摘し、筆者の考え方に対する反論を試みられた<sup>45</sup>。

また樞原考古学研究所の菅谷文則氏は、筆者が別の機会に示した素環式耳飾に対する考え方、つまり「（輪環のみの耳飾は）有機質材料によって製作された垂飾をもつ耳飾の耳環部を構成する輪環であり、したがって古墳出土の耳飾は原則的に耳環部・中間飾・垂下飾の3つの部分から成りたっていると考えてよいであろう<sup>46</sup>」との見解に対して、「（日本の古墳から発見される金環は）わが国96世紀代の金属加工技術の隆盛からも、垂飾部分の金属加工が技術的に不可能でないと推定できるので、あえて垂飾部分を有機質材料で加工する必要はない。このため、古墳発見の金環は垂下式耳飾の一部でなく完成した器物と考えたい<sup>47</sup>」との考え方を示し、素環式耳飾が佩用されたことを指摘された。

筆者はこのような指摘に刺戟され、素環の耳飾で発見される個々の場合を検討した結果、これまで持ちつづけてきた、筆者の素環式耳飾についての考え方が誤っていたことを確認した。素環式耳飾が耳飾の始源的型式とされる尹氏の考え方については今日もなお疑いをぬぐい去り得ないでいるが、とにかく筆者のこれまでの素環式耳飾に対する考え方は、ここで撤回したいと思う。筆者に対しきわめて有益なご指摘を示された両氏に対して、この紙面をかりて深く感謝する次第である。

## 7. 引用図版出典目録

- 図1—1・2：『梅原考古資料目録』（1966）10267号・10274号。  
—3・7：『考古学雑誌』26—4（1936）口絵写真（左下・右上）。  
—4：『嶺南大学校博物館案内』（1974）図10（右）。  
—5・6・8・10：『百済美術』（1946）図版26・27。  
—9：『百済文化』6（1973）姜仁求氏論文の図4。
- 図2—1・2・3：『梅原考古資料目録』（1966）10273号・10278号。
- 図4—1・2：『百済武寧王陵遺物特別展』（1971）図3・4。  
—3：『仏教芸術』83（1972）巻頭口絵写真5。  
—4：『慶州金冠塚と其遺宝』（古蹟調査特別報告 第3冊）（本文上：1924）図24—11。  
—5：『世界文化史大系（日本1）』（1960）図版28（左）。  
—6：『武寧王陵発掘調査報告書』（1973）図版55—3。

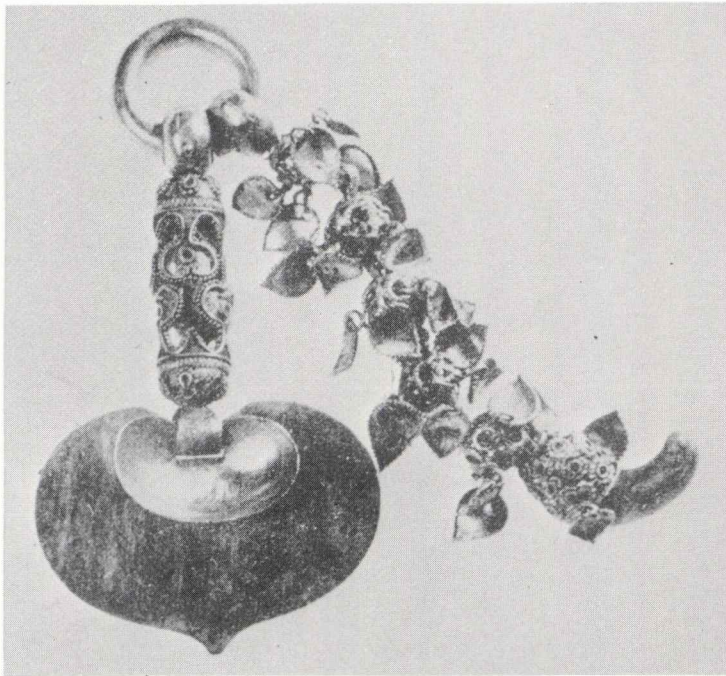
## 注

- (1) 文化公報部文化財管理局『武寧王陵発掘調査報告書』(1973) 図版99。
- (2) 文献：注(1), 図版98。
- (3) 注(2)参照。
- (4) 文献：注(1), 本文35頁では「金製耳飾」と呼びながら、図版55—3の写真説明には「金製瓔珞付小環」となっている。
- (5) あるいは香木の他にガラスや玉類などが嵌入されていたことも考えられよう。このことについて、筆者はすでに第23回朝鮮学会(1972年10月)のシンポジウム「百済武寧王陵をめぐって」の討論の中でのべたことがある。「シンポジウム・百済武寧王陵をめぐって」『朝鮮学報』68(1973)50頁。
- (6) この見解は、注(1)に掲げた報告書や国立博物館『百済武寧王陵遺物特別展』(1971)それに記念絵葉書などにみられる耳飾の写真の観察結果による。
- (7) この材質については、どの報告書にも触れられていない。おそらく硬玉製と思われる。
- (8) 筆者の研究によれば、耳環部の細環の断面径は新しい耳飾になるほど太くなり、後期の耳飾であるC群のそれには、中空の細環がみられるようになる。Akio Ito, Zur Chronologie der frühsillazeitlichen Gräber in Südkorea (1971) 37頁。伊藤秋男「耳飾の型式学的研究に基づく韓国古新羅古墳の編年に関する一考察」『朝鮮学報』64(1972)34頁, 図1。
- (9) 文献：注(1), 35頁。
- (10) 梅原末治氏の収集による膨大な資料(写真・スケッチ・野帳など)で、現在東洋文庫(東京)に所蔵され、一般の閲覧に供されている。未公開の資料もあるが、その大部分はすでに報告された資料である。このカタログは1966年、東洋学術協会から『梅原考古資料目録』(朝鮮の部)として出版されている。
- (11) この結果をここで公表できたのは、穴沢啄光氏のご厚意による。
- (12) なお「梅原考古資料」10274号資料が貼付けてある台紙には、10275号資料として金銅透彫杏葉の写真もみられるが、両者が同一古墳の出土品であるかどうかについての註記はない。
- (13) 軽部慈恩「公州に於ける百済古墳(8)」『考古学雑誌』26—4(1936)206頁。同雑誌同号の口絵写真(左下)。
- (14) 軽部慈恩「公州に於ける百済古墳(1)」『考古学雑誌』23—7(1933)438頁。
- (15) 文献：注(13), 206頁。
- (16) 軽部慈恩「公州に於ける百済古墳(3)」『考古学雑誌』24—3(1934)168頁。
- (17) 文献：注(13), 206頁, 図67(中央上)
- (18) 軽部慈恩「公州に於ける百済古墳(6)」『考古学雑誌』24—9(1934)569頁, 図48(中央上)
- (19) 文献：注(13), 206頁, 図67(右上)
- (20) 軽部慈恩『百済美術』(1946)165頁, 図版26・27。
- (21) 有光教一「新羅金製耳飾最近の出土例に就いて」『考古学』7—6(1936)287頁図4—1。  
なお同型の下垂飾をもつ耳飾は、慶州皇南洞鷄林路第14号墳や慶北月城郡西面金尺里の一古墳から発見されている。国立慶州博物館『国立慶州博物館名品選』(1973)図6(左)・7(右)。
- (22) 浜田耕作・梅原末治「慶州金冠塚と其遺宝」(古蹟調査特別報告 第3冊)(本文上：1924)図24—26。
- (23) 文献：注(13), 206頁, 口絵写真(右上)
- (24) 姜仁求「百済甕棺墓の一型式——扶餘地方の壺棺墓——」『百済文化』6(1973)106~109頁, 図4。
- (25) 嶺南大学校博物館『博物館案内』(1974)図10—右。および1975年3月の館内観察による。
- (26) 1975年3月、博物館を見学した時発見した資料である。出生地は不明であるが、疑いなく百済系の耳飾であり、百済のいずれかの地域で発見された耳飾であるにちがいない。  
なおこの耳飾は、これまでに知られた百済系耳飾のなかでも保存状態がきわめてよく、かつ現存するもののひとつとして重要な資料であるので、博物館の許可を得たうえで、稿を改めて論じたいと思っている。
- (27) 文献：注(13), 206頁, 図67(左2個, 中央下, 右下)。

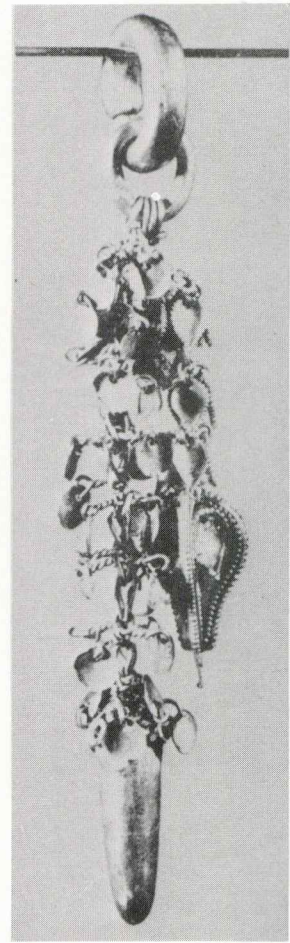
- (28) 文献：注(22), 図24-19。
- (29) 藤田亮策「朝鮮及び内地発見の耳飾に就いて」『日本文化叢考』(1931) 図3 (上例, 右から2個目)。
- (30) 野上丈助「特殊な手工業の発達」『日本民衆の歴史』1 (1974) 12~13頁。
- (31) 文献：注(21), 287頁図7。
- (32) 有光教一「皇吾里第54号墳甲・乙塚」『古蹟調査概報—慶州古墳昭和8年度』(1934) 図版3-1 (左)。
- (33) 金載元・尹武炳『義城塔里古墳』(国立博物館古蹟調査報告 第3冊) (1962) 図版22-A。
- (34) 文献：注(8)の後者, 26頁。
- (35) A型籠球体出土墳：慶州皇吾里5号墳・同54号墳甲塚, 金鈴塚, 金冠塚, 皇南里破壊墳(145-1号墳)第2槨, 皇南里151号墳(石室墳), 路西里215番地古墳, 仁旺洞20号墳C槨, 普門里夫婦塚, 達西面51号墳第2槨・同55号墳。  
B型籠球体出土墳：慶州皇吾里14号墳第1・2槨, 皇吾里5号墳・同33号墳西槨, 仁旺洞20号墳1槨。  
籠球体の型式の不明なもの：慶州皇南里82号墳西槨, 皇吾里古墳北槨, 皇吾里16号墳第7槨, 梁山夫婦塚(婦墓)。
- (36) 齊藤忠「慶州皇南里第109号墳皇吾里第14号墳調査報告」『昭和9年度古蹟調査報告』第1冊(1937) 後編 図版19。
- (37) 文献：注(22), 図版65-1, 図版66。
- (38) 梅原末治「慶州金鈴塚飾履塚発掘調査報告」『大正13年度古蹟調査報告』第1冊(本文=1932, 図版=1931) 図版62。
- (39) 文献：注(38), 図版162。
- (40) 浜田青陵「新羅の宝冠」『宝雲』2 (1932) 19頁の図。国立中央博物館『陳列品図録』(1972) 図52。
- (41) 浜田耕作・梅原末治「慶尚北道慶尚南道古蹟調査報告」『大正7年度古蹟調査報告』第1冊(1922) 図版68-102。
- (42) 文献：注(29), 図3-66。『朝鮮古蹟図譜』3 (1916) 図849 (左)。
- (43) 伊藤秋男「尹世英氏の古新羅・伽倻古墳の編年案について」『考古学ジャーナル』103 (1975) 9~13頁。
- (44) 文献：注(43)12頁。
- (45) 尹世英「古新羅・伽倻古墳の編年案をめぐって」『考古学ジャーナル』111 (1975) 2頁。
- (46) 文献：注(8)の『朝鮮学報』17頁。
- (47) 菅谷文則「古墳時代の耳飾について——とくに金環を中心として——」『古代国家の形成と展開』(1976) 90・91頁。



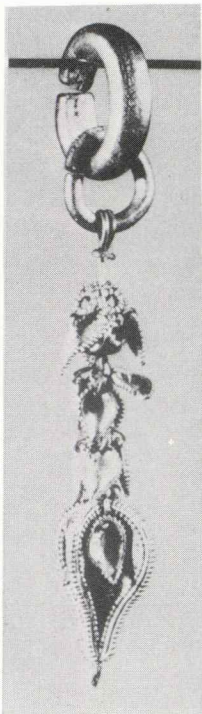




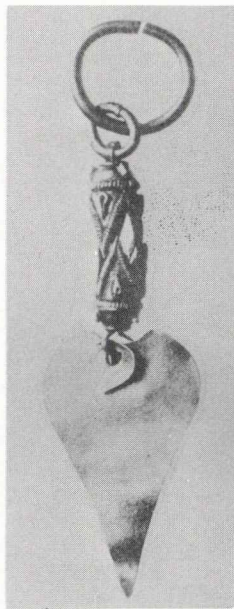
1



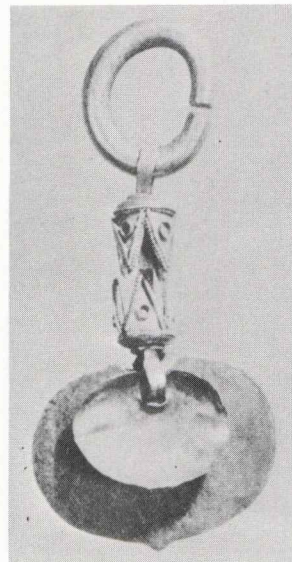
2



3



4



5



6

第4図 武寧王陵発見の耳飾とその比較資料

1：王耳飾，2・3：王姫耳飾その1・その2，4：伝南韓出土，  
5：熊本県船山古墳出土，6：王姫足部発見の耳飾(?)。

